

生徒が自らの学びを振り返り、 次の学習や生活に生かすための授業づくりの検討[†] —知的障害特別支援学校高等部の職業科、家庭科の授業実践を通して—

池田 和馬*・藤井 慶博**・諸岡 美佳***

秋田県立ゆり支援学校*・秋田大学教育文化学部**・秋田県立栗田支援学校***

本研究では、知的障害特別支援学校において生徒が自らの学びを振り返り、次の学習や生活に生かすための授業づくりについて検討することを目的とした。対象校の高等部の職業科、家庭科の授業実践について、教員に対するアンケート調査の回答に基づき、分析した。

その結果、生徒が自らの学びを次の学習や生活に生かすための取組や支援、関係者との連携が効果的だったことが推察された。しかし、知的障害のある生徒の実態差に応じた支援や、普段の学習や生活への般化の難しさ、生徒との指導計画の共有といった課題も浮き彫りになった。今後は、実態差や般化の難しさを補うため、個に応じた支援の工夫を行いながら、学習指導要領で取り扱う内容を着実に実施し、指導計画を基に関係する職員や家庭等が十分に情報を共有、共通理解を進めることが必要と考えた。また、指導計画立案の段階から長期的のスパンで教師と生徒が協働して目標や計画の立案、評価、改善していく授業の構築が求められる。

キーワード：振り返り、学習評価、授業づくり、教育課程

I 問題と目的

中央教育審議会答申（2016）では、学習評価により教師が指導の改善を図るとともに、「児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができる」よう、児童生徒自身による学習評価の充実を提言している。この答申を踏まえ、2020年度から順次実施されている特別支援学校学習指導要領（2017）では、「生きる力 学びの、その先へ」のテー

マのもと、学校で学んだことが、明日、そして将来につながるとともに、変化の激しい予測困難な社会の中で、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動できる生きる力の育成が提起された。

また、特別支援学校学習指導要領解説（2018）では、生きる力の育成に向けて「児童生徒が自主的に学ぶ態度を育み、学習意欲の向上に資する観点から、各教科等の指導にあたり、児童生徒が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫する」ことが求められている。

そうした中、この生きる力を育むための授業づくりが学校現場等で検討されている。例えば、福岡市教育センター（2019）は、児童生徒が自ら知識をつなぎ、他の場面に生かすことができる授業の在り方を検討した結果、各単元や題材、特定の場所の中で知識をつなげることができたものの、他の単元や教科、日常生活、新しい場面などに生かしていくため

2023年1月10日受理

[†] Kazuma IKEDA*, Yoshihiro FUJII** and Mika MOROOKA***, Developing Classes in Which Students Can Reflect on Their Own Learning and Use It in Their Future Studies and Life -Through the practice of vocational and home economics classes in the senior high school departments of special needs schools for students with intellectual disabilities-

* Akita Prefectural Yuri Support School

** Faculty of Education and Human Studies, Akita University

*** Akita Prefectural Kurita Support School

の指導計画、授業実践が課題であることを報告している。

池田ら(2022)は、知的障害特別支援学校における振り返りに焦点を当てた授業改善の実践を通して、授業のめあてと振り返りの整合性や、見通しの明確な学習活動の展開など、教師サイドの成果を認めつつも、児童生徒が自ら学びを振り返り、その学びを次の学習や生活につなげていく内容・方法を検討していく必要があることを課題に挙げている。

これらの課題を解決するために本研究では、知的障害特別支援学校における生徒が自らの学びを振り返り、次の学習や生活に生かすための授業づくりについて検討することを目的とした。

II 方法

1 実践

2020年度、2021年度の2年間、A県立B特別支援学校高等部では、職業科、家庭科の授業を通して、「生徒が自らの学びを振り返り、次の学習や生活に生かすための授業づくり」に取り組んだ。主な取組内容を表1に示した。

1) 全学年

- ①生徒が学びに対する必然性や期待感をもち、自分事として捉えられるように本時の「めあて」をhow to型、What型で設定した。
- ②学びを生徒自身が深く自覚できる「振り返り」となるように、学んだことを思い出し、活用できるファイルから学びの履歴を探して発表する機会を設定したり、本時の成果物(作成した表やグループで話合ったシートなど)を実際に見合ったりする「振り返り」を行った。
- ③学習活動を日常的に活用できるような展開の工夫として、自分の課題に集中して取り組む「2週間チャレンジ」を家庭で行ったり、週末や長期休業中の家庭での課題を設定したりした。
- ④次の学習や生活につなげるために、前時のワークシートを活用する場面を設定したり、家庭で挑戦する目標に対して毎日振り返るためのチェックシートを用意したりした。
- ⑤生徒が学期毎に作成しているキャリア・パスポートの目標を意識するとともに、生徒と職員で目標と評価を共有できるように、一人一人が目標と評価を発表している様子を撮影し、動画上映週間を設定した。

表1 主な取組内容

全学年	①自分事として捉えられる「めあて」の設定 ②学びを生徒自身が深く自覚できる「振り返り」の工夫 ③学習活動を日常的に活用できるような展開の工夫 ④次の学習や生活につなげるワークシート等の工夫 ⑤動画によるキャリア・パスポートの目標と評価の紹介
高3年	①寄宿舎の施設と職員を活用した日常生活につなげる授業 ②学んだことを後輩に伝える高3生徒による特別授業
高2年	・学びを次の授業につなげる確認テスト
高1年	・学びを家庭につなげる家庭科通信の発行

2) 高3年

- ①家事の分野において日常生活につなげる技能となるように、寄宿舎の施設を借りて、寄宿舎職員をゲストティーチャーに活用した授業を行った。
- ②職業の授業で学んだことをまとめ、後輩に伝える特別授業を行った(図1)。

3) 高2年

- ・前時の学習の定着度を図り、本時の学びにつながるように、授業の導入時に確認テストを行った。

4) 高1年

- ・学校での学びを、家庭でも挑戦したり、家族との会話の中で確認したりできるように、単元の終了時に家庭科通信を発行した(図2)。

なお、対象を職業科、家庭科の授業にした理由は、学習指導要領の目標において「よりよい生活の実現に向けて工夫する資質・能力を育成することを目指す」と両教科ともに記されており、キャリア発達を促す重要な教科と捉え、自らの学びを次の学習や生活に生かす授業に適していると考えたからである。

2 方法

A県立B特別支援学校高等部の教員31名に対し、職業科、家庭科の授業づくりに関するアンケート調査を2回実施した。1回目は2020年4～5月で1部の設問項目(表2中の⑨、⑩)は2021年4～5月、2回目は2021年12月に実施した。回答は、1回目が26名(83.9%)、2回目が27名(87.1%)から寄せら



図1 学んだことを後輩に伝える
高3生徒による特別授業

れた。なお、1回目、2回目ともに回答した教員は20名であった。

それぞれの項目について、「よくしている」(4点)、「ときどきしている」(3点)、「あまりしていない」(2点)、「ほとんどしていない」(1点)の選択肢により回答を求め、平均値を比較した。

また、2回目(2021年12月)には、授業づくりの内容・方法や生徒の変容を具体的に評価できるように自由記述による回答も求めた。

なお、倫理的配慮として、研究の趣旨や内容、データの扱い、結果の発表についてB特別支援学校の校長から許可を得た。

Ⅲ 結果

1 設問項目への回答の結果

設問項目への回答の結果を表2に示した。

- ・1回目に比べ2回目ですべての項目の平均値が上がった。
- ・平均値が大きく伸びた項目の上位3つは、「②日頃から『振り返り』のカードを使って授業をしている」(+0.88)、「③日頃から授業のゴールから『めあて』を設定している」(+0.68)、「⑥『めあて』と『振り返り』の整合性を意識した授業をしている」(+0.64)の順であった。
- ・「⑨生徒自身が学びをつなげる(次に生かす)ための支援を工夫している」と「⑩生徒自身が学びをつなげる(次に生かす)様子が見られる」の項目の平均値が、類似した数値の伸びを示した。
- ・1回目と2回目の平均値が3.00未満となったのは、

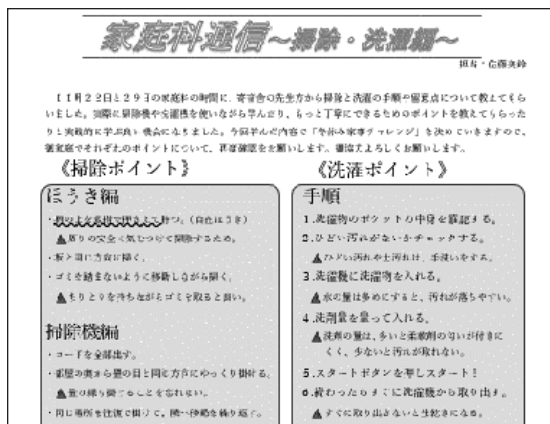


図2 学びを家庭につなげる家庭科通信(抜粋)

「⑦個別の指導計画の目標を生徒と一緒に共有している」「⑧個別の指導計画の評価を生徒と一緒に共有している」の2項目であった。

2 自由記述の結果

自由記述の回答については、筆者らが協議のうえ内容を要約し、KJ法に準じてカテゴリー化し、分析した。

【教師の支援の変容】

「教師の支援の変容」は、3つの大カテゴリーに分類された(表3)。

「学びをつなげる支援の充実」では、家庭や寄宿舎と連携した学習活動、学習グループの工夫が挙げられた。また、他の指導場面に つなげる支援や実践的な授業が増加したことが挙げられた。

「評価の充実」では、生徒自身が評価できるめあてや基準を設定したことが挙げられた。また、生徒による振り返りや自己評価の機会が充実したことや、自己評価と他者評価の関連付けが行われたことが挙げられた。

「見通しをもたせる支援の充実」では、見通しのもてる繰り返しの活動や、明確なゴールの設定が充実したことが挙げられた。

【生徒の変容】

「生徒の変容」は、3つの大カテゴリーに分類された(表4)。

「主体的な学習姿勢」では、学習を自分事として捉える姿や、次の学習や生活へ般化する姿が見られたことが挙げられた。また、自発的な行動の増加や、学習への見通しと自分の役割の理解が挙げられた。

表2 職業科・家庭科の授業に関するアンケート調査結果

設問項目	平均値	増減
①単元（題材）や1単位時間毎に一人一人の子どもの成長を評価している	2.77 ----- 3.37	+0.60
②日頃から「振り返り」のカードを使って授業をしている	2.38 ----- 3.26	+0.88
③日頃から授業のゴールから「めあて」を設定している	2.69 ----- 3.37	+0.68
④生徒が学んだことを整理したり、自分の考えをまとめなおしたりする時間を保障している	2.62 ----- 3.19	+0.57
⑤活動や振り返りの際に、生徒の学習の成果を見取り、価値付たり意味付けたりしている	2.88 ----- 3.30	+0.42
⑥「めあて」と「振り返り」の整合性を意識した授業をしている	2.69 ----- 3.33	+0.64
⑦個別の指導計画の目標を生徒と一緒に共有している	2.65 ----- 2.93	+0.28
⑧個別の指導計画の評価を生徒と一緒に共有している	2.35 ----- 2.93	+0.58
⑨生徒自身が学びをつなげる（次に生かす）ための支援を工夫している	2.81 ----- 3.33	+0.52
⑩生徒自身が学びをつなげる（次に生かす）様子が見られる	2.85 ----- 3.30	+0.45

※上段は1回目（2020年4～5月、⑨、⑩のみ2021年4～5月）、下段は2回目（2021年12月）の平均値

表3 自由記述の結果【教師の支援の変容】(n=74)

学びをつなげる 支援の充実 (48)	家庭や寄宿舎と連携した学習活動 (15) ----- 学習グループの工夫 (15) ----- 他の指導場面に つなげる支援の増加 (10) ----- 実践的な授業の増加 (8)
評価の充実 (21)	生徒自身が評価できるめあてや基準 の設定 (9) ----- 生徒による振り返りや自己評価の機 会の充実 (8) ----- 自己評価と他者評価の関連付け (4)
見通しをもたせ る支援の充実(5)	見通しのもてる繰り返し活動 (3) ----- 明確なゴールの設定 (2)

表4 自由記述の結果【生徒の変容】(n=66)

主体的な学習姿 勢 (43)	学習を自分事として捉える姿 (15) ----- 次の学習や生活への般化 (13) ----- 自発的な行動の増加 (11) ----- 学習への見通しと自分の役割の理解 (4)
自己評価と他者 評価の充実 (12)	生徒自身の振り返りの充実 (6) ----- 生徒間のプラス評価による自己有用 感の涵養 (4) ----- 自己評価による新たな課題の発見 (2)
学習の効果の実 感 (11)	知識・技能の向上 (10) ----- 自分の成長を実感する姿 (1)

表5 自由記述の結果【課題（教師）】(n=32)

般化の場面の設定 (21)	連携する相手による温度差 (10)
	学習指導要領で取り扱う内容の着実な実施 (4)
	学びをつなげる教育課程の編成 (4)
	学習定着に向けた支援の工夫 (3)
実態差 (11)	生徒自身が評価できるめあてや評価基準の設定 (5)
	指導内容に即しためあてと振り返りの設定 (4)
	指導計画の生徒との共有 (2)

「自己評価と他者評価の充実」では、生徒自身の振り返りの充実や、生徒間のプラス評価による自己有用感の涵養が挙げられた。また、自己評価により新たな課題を発見したことが挙げられた。

「学習の効果の実感」では、知識・技能の向上や、自分の成長を実感する姿が挙げられた。

【課題（教師）】

「課題（教師）」は、2つの大カテゴリーに分類された(表5)。

「般化の場面の設定」では、連携する相手による温度差や、学習指導要領で取り扱う内容の着実な実施が挙げられた。また、他教科や作業学習等との関連など学びをつなげる教育課程の編成や、学習定着に向けた支援の工夫の必要性が指摘された。

「実態差」では、生徒自身が評価できるめあてや評価基準の設定が挙げられた。また、指導内容に即しためあてと振り返りの設定や、指導計画を生徒と共有することの必要性が指摘された。

【課題（生徒）】

「課題（生徒）」は、2つの大カテゴリーに分類された(表6)。

「実態差」では、肯定的な自己理解の難しさや、自己評価と他者評価のズレが挙げられた。また、授業に対する集中力の欠如や、振り返りの難しさが指摘された。

「般化の難しさ」では、普段の学習や生活への般化や、思考と行動の乖離が挙げられた。

IV 考察

1 成果

1) 学びを次の学習や生活につなげる取組や支援の効果

設問項目の回答結果から、授業のゴールから授業

表6 自由記述の結果【課題（生徒）】(n=32)

実態差 (19)	肯定的な自己理解の難しさ (7)
	自己評価と他者評価のズレ (5)
	授業に対する集中力の欠如 (4)
般化の難しさ (13)	振り返りの難しさ (3)
	普段の学習や生活への般化 (11)
	思考と行動の乖離 (2)

をデザインするようになるなど、めあてと振り返りの整合性が図られたことが成果として挙げられた。また、学びを次の学習や生活につなげる取組や支援の工夫により、生徒自身が学びを生かす様子が見られるとの回答が増えた。

臺(2016)は、振り返り活動の実践研究を通して、「知的障害のある児童に対して、学習の記録を残し、授業のイメージをもたせるなどの指導・支援を行うことは、主体的に学ぶ意欲を高めることに有効である」と指摘している。

これらのことから「生徒が自らの学びを振り返り、次の学習や生活に生かすため授業づくり」の取組は、授業のイメージをもたせるなど教員の指導・支援の充実へ寄与し、学習に対する生徒の主体性の涵養に一定の効果があったと考えた。

2) 学びをつなげる場面の設定と関係者との連携

設問項目の回答結果から、生徒自身が学びをつなげる(次に生かす)ための支援を工夫していたことや、生徒自身が学びをつなげる(次に生かす)様子が見られたことが示唆された。また、自由記述の回答結果から、学年を越えた学び合いなどの学習グループの工夫や、他の指導場面につなげる支援、実践的な授業の増加が成果として挙げられた。とりわけ、家庭や寄宿舎と連携した取組が、学んだことを生かす必然性をもたせ、より生徒自身が自分事として学習に向かう主体的な姿につながり、学びをつなげる上で効果的だったと推察された。

3) 学習の見通しと生徒自身の評価の充実による学習の効果

自由記述の回答結果から、分かりやすいめあてや振り返りを提示するなどの見通しをもたせる支援の充実や、生徒自身が評価する機会が増えたことが挙げられた。これらの取組により生徒自身の振り返りや自己評価の充実、他者評価による生徒間のプラス評価による自己有用感の涵養、知識・技能の向上につながったと考えた。

知的障害特別支援学校における授業の振り返りに関し、太田(2012)は、子どもにおいては、授業の初めに「見通し」を立てることが「振り返り」につながり、「学習内容の確実な定着」に結び付くことから、「見通し-学習-振り返り」という学習過程の重要性を提唱している。

このように、生徒自身が学習を見通し、振り返り、次の学習や生活に生かすという循環が学習の効果を高めたものと推察された。

2 課題

1) 実態差への対応と指導計画の共有

小島ら(2004)は、知的障害者自身の自己叙述に基づく自己理解に関する研究結果から、知的障害者がその障害特性ゆえに自己理解に関するすべての質問項目に対して回答することが健常者に比べて困難であることを報告している。また、福岡市教育センター(2019)は、特別支援教育における「深い学び」の実現には、子ども個々の実態による難しさを軽減・除去する必要があることを指摘している。

本実践における自由記述の回答結果(生徒)からも、肯定的な自己理解の難しさや、自己評価と他者評価のズレ、また授業に対する集中力の欠如などの実態差が課題として挙げられた。その課題解決のために教師側の課題として挙げられた、生徒自身が評価できるめあてや評価基準の設定、指導内容に即しためあてと振り返りの設定、指導計画の生徒との共有といった内容の工夫、改善が必要と考えた。

また、高橋ら(2020)は、児童生徒が主体となって作成する個別的教育支援計画に関する実践により、生徒が教師との対話を通して、自らの目標を設定したり、評価したりすることの有効性を提起している。

本研究の設問項目で、「個別の指導計画の目標・評価を生徒と一緒に共有している」の平均値が低かったことから、個別の先述した指導計画を教師と生徒が対話を通して共有できるような取組が求められよう。

2) 般化を促進するための関係者との連携と、学びをつなげる教育課程の編成

設問項目や自由記述の回答結果から、学びをつなげる場面の設定と関係者との連携が、生徒の主體的な学習姿勢や、学習の効果の実感につながっていたことが示唆された。一方で、連携する相手による温

度差や、学習定着に向けた支援の工夫等が教師の課題として挙げられた。また、普段の学習や生活への般化や、思考と行動の乖離等が、生徒の課題としても挙げられていた。そのため、自由記述の回答結果(教師)で示された般化の場面の設定を工夫し、学びをつなげる教育課程の編成が課題と考えられた。

石羽根(2021)は、知的障害のある児童生徒のキャリア・パスポートの活用に向けて、児童生徒の願いと学びをつなぐために、本人の願いを踏まえた目標を可視化、具体化、共有化することの必要性を提起している。

このように、般化の場面を具体的に設定すること、生徒と教師との目標や評価を共有することが、学びを次の学習や生活に生かすために必要な要件であると考えた。

V まとめと今後に向けて

本研究は、知的障害特別支援学校における授業実践を通して、生徒が自らの学びを振り返り、次の学習や生活に生かすための授業づくりについて検討した。その結果、学びを次の学習や生活に生かす取組や支援、関係者との連携は効果的であったと考えられた。一方、知的障害の生徒における実態差や般化の難しさ、生徒との指導計画の共有という課題が浮き彫りになった。

今後は、実態差や般化の難しさへの対応として、個に応じた支援の工夫を行いながら、学習指導要領で取り扱う内容を着実に実施し、各教科や各教科等を合わせた指導とのつながりを意識した教科等横断的な視点で教育課程の編成に取り組んでいくことが必要と考えた。また、般化を見据えた計画的な指導計画を基に関係する職員や家庭等が十分に情報を共有し、共通理解を進めることも求められる。

そして何より、教師側から生徒に対して目標や評価、計画を共有することが不十分であるという現状を改善し、指導計画立案の段階から長期的スパンで生徒の学びたいことやこれから学ぶこと、学んだことや課題を生徒と共有していく授業の構築が求められよう。

文 献

中央教育審議会(2016):幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)。

- https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (Retrieved 2022.12.31)
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 (2019)：児童生徒の学習評価の在り方について (報告).
- https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/attach/1292216.htm (Retrieved 2022.12.31)
- 池田和馬, 諸岡美佳, 藤井慶博 (2022)：知的障害特別支援学校における「振り返り」に焦点を当てた授業改善－共通実践事項の設定とその実践状況の評価を通して－. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 第44号, 77－83.
- 石羽根里美 (2021) 児童生徒に対するキャリア発達を促すためのキャリア・パスポートの活用－目標の具体化と学習との関連付けを図るためのツール開発と効果的な対話の在り方の検討－. 令和2年度千葉県長期研修生報告書.
- 福岡市教育センター特別支援教育研究室研究報告書 (2019)：知識をつなげ, 他の場面に生かすことができる児童生徒の育成－RPDCA サイクルに基づく指導目標の設定を通して－.
- http://www.fuku-c.ed.jp/center/report/tyousa/r01/R01_g_tokushi.pdf (Retrieved 2022.12.31)
- 藤井慶博・高田屋陽子 (2017)：個別の教育支援計画の作成と活用に関する現状と今後の方策－特別支援学校教員に対する質問紙調査から－. 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学第72集, 93－101.
- 小島道生, 池田由紀江 (2004)：知的障害者の自己理解に関する研究－自己叙述に基づく測定を試み－. 特殊教育学研究, 42, 3, 215－224.
- 文部科学省 (2017)：特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則等編 (幼稚園部・小学部・中学部) (平成29年告示).
- 文部科学省 (2018)：特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編 (小学部・中学部).
- 文部科学省 (2019)：特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編 (高等部).
- 文部科学省 (2020)：特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料.
- https://www.mext.go.jp/content/20200515-mxt_tokubetu01-1386427.pdf (Retrieved 2022.12.31)
- 文部科学省初等中等教育局長通知 (2019)：小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について (改善等通知).
- https://www.mext.go.jp/content/20200318-mxt_daigakuc02-000005730_12.pdf (Retrieved 2022.12.31)
- 文部科学省：平成29・30・31年改訂学習指導要領周知・広報リーフレット.
- https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2019/02/14/1413516_001_1.pdf (Retrieved 2022.12.31)
- 太田正巳 (2012)：知的障害の授業展開「まとめ」をすれば授業の効果が上がる－学習活動「見通し・振り返り」と評価－. ジアース教育新社, 27.
- 高橋基裕, 藤井慶博 (2020)：当事者主体の個別の教育支援計画の実践とその効果に関する研究, 発達障害研究, 第41巻, 第4号, 343－354.
- 臺明子 (2016)：知的障害のある児童の主体的に学ぶ意欲を高める振り返り活動の工夫－単元全体をつなぐ「振り返りファイル」の活用を通して－. 広島県立教育センター. 平成28年度教員長期研修 (前期).

Summary

The purpose of this study was to examine the development of classes in which students can reflect on their own learning and apply it to their future studies and life in special needs schools for students with intellectual disabilities. The practice of vocational and home economics classes in the senior high school departments was analyzed based on the responses to a questionnaire-type survey of teachers.

As a result, it was inferred that their efforts and support for students to use their own learning as they progress in their further studies and in life, as well as the cooperation with related parties, were effective. However, some issues were highlighted, such as difficulties in providing support to students with intellectual disabilities according to the differences in their actual conditions and

their general difficulties in navigating everyday learning and life. In the future, to make up for the differences in actual conditions and difficulties in generalization, we will implement the contents covered in the courses of study while devising individualized support. In addition, we considered it necessary for the staff and the families, etc., involved to fully share information and promote common understanding, based on the teaching plan. Above all, it is necessary to develop classes

in which the teachers and students collaborate to develop goals and plans and to improve evaluation methods over the long-term, starting from the early stages of the development of the teaching plan.

Key Words : Reflection, Learning evaluation, class creation, curriculum

(Received January 10, 2023)